

03・逃亡者になる

SE1 .. 図書室の環境音

【頭から最後まで流す】

【ごく小さな音で、場面転換まで流す】

【0―5秒ほどまで流してSE2と重ねる】

『02・お菓子とお手紙』から約半年後。

次の年の夏、夏休みのある日。

クラウドディア、あまり使われていない白鹿女学院旧図書館地下書庫で、一人勉強している。

勉強とはいいつつ、さつきから音楽雑誌ばかり読んでいるのは許してほしい。

図書館所有の雑誌は競争率が高いから、早く読んで元の場所に戻さなくてはならないし、今月の巻頭特集は好きなアーティストなのである。

さらに言えば、主人公もこの人が好きなので、最新情報を仕入れておかなくてはならない。

それから『夏休みなのだから、いつもより競争率は低いのでは?』とは聞かないで欲しい。

ということで、クラウドディアはこの地下書庫が大好きである。

何せ人が来ない。さらに広い。おまけに涼しい。すっきりくつろいでいる。

難点があるとすれば、ここにいても、主人公にはまず会えない事だろうか。

主人公はおそらくこの場所を知らない。エンカウントは期待できないのである。

学院は、先週から夏休みになった。

しかし、クラウドディアは『とにかく家には帰りたくない』という理由で実家には戻らず、寮で過ごす事になっている。

一般的に夏休み期間中、学生寮は閉鎖されそうなものだ。

だが、この学校は部活動に力を入れているので、寮に残りたい子もそれなりにいる。結果、許可されているのである。

もっとも、部活もやっていないのに残っているのは、クラウドディアくらいのものだが。

なので、夏休みも学生寮にいるクラウドディアは、ここのとこ毎日校舎に顔を出し、あわよくば主人公に会えないかと思っている。

だが、一向に会えない。

先生たちは、休み中も毎日学校に來ていると聞いたのだが……。
今日も会えなさそうだ。ていうかお腹すいてきた。お昼は何を食べよう……。
と、思っていると。

SE2 ..エレベーターが到着する音

【頭から最後まで流す】

【ごく小さな音で、かすかに聞こえる程度に流す】

SE3 ..主人公の足音

【頭から流す】

【0―4秒ほどまで流して止まり、セリフ】

珍しく誰かがやってきたようだ。……主人公だ！

〈主人公〉

「橘さーん」

【驚いて息をのむ】

あっ……先生！　どうしてここへ？」

クラウドディア、突然の事に、心の準備ができていない。

ダンジョンの入り口付近を歩いていたら、突然ボスキャラに遭ったような気分である。

〈主人公〉

「掃除のおばさんに教えてもらったんだ。橘さんはここで作業するのが好きだって。今、大丈夫？」

「【なるほど、と納得する】」

あ、掃除のおばさんに聞いて？　はい。大丈夫です。雑誌見てただけなので……」

クラウドディア『ついに主人公に会えた！　しかも自分を探しに来てくれたなんて！　今日は最高の日だ！』と思う。

〈主人公〉

「池脇さんだっけ。すごく仲がいいんだね」

「そうなんです。すごくよくしていただいていて」

〈主人公〉

「それにしても、よくこんな場所見つけたね。

こんな人の来ない場所があるなんて、知らなかったよ」

「あはっ。ここ、穴場なんですよ。

知ってる人って全然いないんじゃないかなって思います」

〈主人公〉

「ここも、池脇さんが教えてくれたの？」

「いえ、自分で見つけました。

【少し言い出しにくいが、言う】

あの、ほら。先生とお話するようになるまでは、私いつも一人だったので……。人が来ないところ探すの得意になっちゃって。

【少し間をあけてから】

ここ、本当にすごくいいんですよ。

わざわざ旧図書館までくる子はなかなありませんし、さらに夏休みですから、
ほぼ貸切です。

だから、少しくらいおしゃべりしても平気です。

【少し間をあけてから。ここまではしゃべって、急に緊張してくる】

あの、先生が来て下さるなんて、思いませんでした。

他の先生とは何人かお会いしましたが、先生とは夏休み初ですね。
ところで、何のご用でしたか？」

〈主人公〉

「ううん！ 特に何もないんだけど。

橘さんは夏休み、ご自宅に戻らずに寮にいて聞いてたから。

『いるかな？』って思って寮へ顔を出してみたら、池脇さんがここだよって教えてくれたんだ。だから来てみたの。すんなり会えてよかったあ」

クラウドディア『池脇さん最高です』と思っている。

池脇さんはクラウドディアと特に仲のいい掃除のおばさんで、クラウドディアの家庭の事情も知っている。

なのでクラウドディアを案じて、本当の親戚のように世話を焼いてくれるのである。
ちなみに彼女は、クラウドディアの主人公への想いも知っている。

最初はピンと来ていなかったようだが、次第にクラウドディアの本気ぶりを理解し、今ではすごく応援してくれているのだ。

クラウドディア、内心ガッツポーズをするが、主人公が不思議そうにしているのに気づく。
確かに主人公からしてみれば、部活に入っているわけでもないクラウドディアが寮に残っている事は奇妙だろう。

だが主人公は聞いてこない。クラウドディアに気を遣っているのである。
でも、クラウドディアとしては気にする事ではないし、むしろ自分の事を知ってほしい。
なので、ここにしている事情を話してみる。

「ああ……。先生はご存知なかったですよね。

【さらっと言う。主人公を心配させたくない】

私実は、橘の家の本当の子じゃないんです。

【苦笑いして】

だから実家には居づらくて。

【※マークまで声が明るい。主人公に褒めてほしい】

なので今回は思い切って、帰らないで寮に残る事にしましたんです。

だからここにいたという訳です」

〈主人公〉

「そっか……そうだったんだね」

「【明るく】

はい！

【少し間をあけてから】

ふふ。だから今年の夏は最高です。

去年は少々帰って、暗い日々を過ごしてましから。

学内でアルバイトもするんですよ。

明後日からなんですけど、今からとても楽しみなんです」

※

〈主人公〉

「へえ！ 何のお仕事するの？」

「えっと、色々やるんです。」

普段バイトしてる子が実家に戻っているので、夏休み限定の補充で、何か所か行きます。

私以外にも、同じ仕事をする子がいるみたいなので。

【ちよつと張り切っている】

これを機に仲良くなれたらって思ってます」

クラウドディア、コミュ障を脱しつつある事を主人公にアピールしたい。

いつまでも『暗くて友達のいない子』だとは思われたくない。

主人公に少しでも好きになってもらうために、日々自分を変えようと努力している事を知ってほしいのである。実際に変わっているかはさておいて……。

〈主人公〉

「すごい。アクティブだね！ 私も一緒に働きたーい！」

【冗談でも嬉しい】

ふふ」

〈主人公〉

「橘さん、明るくなったね。なんだかすごく嬉しいな」

「はい。自分でもすごく明るくなったと思います。」

入学した頃の私は本当に暗くて、話しかけづらかったと思うんですけど……。今は違う。少しずつですけど、自分の気持ちを言えるようになりました。先生のおかげです。先生がいたから、私こんなに前向きになれたんです」

〈主人公〉

「そ、そっかあ……。嬉しいなあ。なんだか照れるよ」

「ふふふ」

主人公、照れる。同時に『橘さんって本当にかわいいなあ……。こないいい子に慕ってもらえるなんて、わたしは本当に幸せだなあ……。』と思っている。

『それにしても、橘さんに感謝されると、わたしはどうしてこんなに嬉しいんだろう』と思うが、その理由はわからない。主人公は鈍感である。

とりあえず、わざわざここまで来た本題を伝える事にする。

〈主人公〉

「ところで、お昼ってもう食べた？　　というかこれから用事ある？」

クラウドディア、まだ何も言われていないのに、飛び上がりそうなほど嬉しくなる。
『これ、もしかしてご飯に誘われちゃうやつ?』とドキドキしている。

「ものすごく期待している」

えっ? いいえ。まだです。

【正直『おなかすいた……そろそろご飯行こ……』とさっきまで思っていたが、嘘をつく】
もうお昼だったんですね。気づきませんでした」

〈主人公〉

「よかったら一緒に食べに行きませんか。

実はね、中島のショッピングモールで使えるお食事券をさっき池脇さんにもらったのね。
三千円分もあるんだよ。

なんか、『〇〇円買ったら一回くじ引き』みたいなので当てたらしいんだけど、期限内
にご家族との都合がつきそうにないから、捨てようと思ってたんだって。

『橘さんと食べておいで』って言われたんだけど……どう?」

クラウドディア、雷に打たれたような衝撃を受ける。

まさかここまで池脇さんにサポートしてもらえとは思っていなかった。
『す、すばらしいアシスト……！　あとで焼こうお菓子を。先生ではなく池脇さん専用』
と思う。

「抑えようとはしているが、ものすごくテンションが上がっている」
行きます。一緒にご飯、したいです。

「だが、ここでふと我に返る」
でも大丈夫でしょうか？　先生と生徒で出かけても……」

〈主人公〉

「まあ、女性同士だし、問題ないんじゃない？
前も莉緒菜さん……眞鍋さんたちに誘われてアイス食べに行った事あるし」

「そうなんですか……」

クラウディア、内心『いいの？　それ？』と思っている。
『ていうか今、眞鍋さんの事下の名前で呼んでた？　多分眞鍋さんが呼べって言ったんでしょね。絶対そう！』と思う。

去年のセクハラの件もそうだが『同性だから大目に見る』『同性だから多少距離が近くともよい』という発想は、早々に消滅するべきである。と感じる。

たとえば、この白鹿女学院が共学になったでしょう。それでも大半の男子生徒よりも、自分や莉緒菜の方がよっぽど下心がある、危険な存在となる気がするのだが……。

いや、どうなんだろう。今は女子校だからわからないが、共学になった途端、主人公は男子生徒にもモテるかもしれない。

ふたを開けてみなければ、その内訳はわからない。
つまり、シユレディンガーの危険人物……？

いや違うわ。私『シユレディンガー』って言うてみたかったただけだわ。
などと思っている場合ではない。先生が誘ってくれている！

〈主人公〉

「もちろん、無理にとは言わないけど……」

「ハッと我に返り、一緒に出掛けたい気持ちを強くアピールする」

いえ。ぜひご一緒させて下さい。

【嬉しくて声が明るい】

お食事券三千円分が当たるって、すごいですね。

私もそのモールのくじ引き引きましたが、ティツシュしか当たらなかったです」

〈主人公〉

「じゃあ、行こう！」

【声がさらに弾む】

はい。今すぐ着替えてきますね」

一度フェードアウトする。しばらく間をおいてから次のシーン。

数十分後。

主人公とクラウド、シヨツピングモールへ向かうため、学院から少し歩いたところにあるバス停から、バスに乗車する。

外は雨。雨だがクラウドディアのテンションは高い。

主人公と二人で出かけるなんて、初めての事だからである。

もしもの事があってもいいようにとデート用コードを前々から考えていたが、まさか実現するとは思っていなかった。

さらに今日はスムーズにバスが来て、車内もすいている。これは幸せだ。クラウドディア、きつと今日は素晴らしい日になるに違いない。と考える。

SE 4 ..バス車内の環境音

【頭から最後まで流す】

【ごく小さな音で流す】

【0―5秒ほどまで流してから**SE 5**。その後、セリフの邪魔にならない音量に下げる】

SE 5 ..クラウドディアがバス車内を歩く音

【頭から流す】

【ごく小さな音で流す】

【**SE 6**と一緒に流す】

【0―5秒ほどまで流してから**SE 7**】

SE 6 .. 主人公がバス車内を歩く音

【頭から流す】

【ごく小さな音で流す】

【SE 5と一緒に流す】

【0―5秒ほどまで流してからSE 7】

SE 7 .. 二人が着席する音

【頭から流す】

【ごく小さな音で流す】

【3―5秒ほどの、一回分の『ストン』のみ流してセリフ】

【声が弾んでいる。車内がすいていて嬉しい】

ちやうどバスが来てよかったですね。

モールまで少しありますよね。十分くらいでしたっけ」

〈主人公〉

「……………」

クラウディア、ウキウキと主人公に話しかける。
しかし、肝心の主人公の様子がなんだかおかしい。

二人は現在、車内真ん中よりやや後ろくらいの、二人掛けの席に座っている。

主人公は、席に着く際、一瞬それよりも後ろ側の席を見ていたのだが、それから、なんだか静かになってしまったのである。

【不思議そうに】

……先生？

【少し間をあけてから】

もしかしてあちらの方、お知り合いですか？」

〈主人公〉

「……うん」

「ご挨拶しなくても……」

クラウディア『ご挨拶しなくてもいいのですか？』と聞こうとして、主人公の様子がますますおかしい事に気づく。

顔は真っ青で、身体は縮こまっていて、なんだか気まずそうにしている。少なくともこれは、積極的に挨拶したい相手に出会った時の態度ではない。

【小声でそっと尋ねる】

先生、大丈夫ですか。顔色が悪いです」

〈主人公〉

「……ええつと……」

【小声で優しく】

大丈夫ですよ。あの。話せる範囲で」

〈主人公〉

「……ううん。全部話すね。橘さんの言う通り、あの人は、知ってる人。それから……」

【とても優しく】

ええ。あのお知り合いの方が何か」

〈主人公〉

「……昔仲良くしてたけど、急に連絡が取れなくなった人。

てつきりお引越したのかなと思ってたんだけど、まだ近くに住んでたんだねえ。ちよつと油断してたかも。

平日の昼間なら、知り合いに会はずないって思い込んでた……」

クラウディア、この話を聞いて『お知り合い』を敵と認識する。

なぜなら、主人公は今必死に笑顔を作ろうとしているが、完全にひきつっている。そもそも、音信不通になる関係。それが良好な可能性とは言いがたい。

クラウディア『ていうか何？ 先生と連絡とれる間柄なのに音信不通になるって何様？

どんな贅沢？ 私は先生の連絡先知らないのに！』と、どんどん腹が立ってくる。

いや、自分が先生の連絡先を知らないのは仕方ない。話の焦点はそこじゃない。

焦点は、二人の再会が、主人公にとって良いものではない事である。

「【声が少し低くなるが、優しく】

……会いたくない人なんですわね」

クラウドディア、二人の関係について考える。

『昔仲良くしていた人』というのはいまいな表現だ。

だが、主人公の様子から、二人は、かつて相当親しかったか、あるいは、少なくとも主人公は相当好意を抱いていたのだろうと推測できる。

つまり主人公は、まだこの『お知り合い』に、何らかの強い感情があるのだ。だから今、こんなにうるたえているのだ。

クラウドディア、『先生は今、隣にいる私よりも、あの人の事が気になるんだな』と思うと、正直なところ、心が曇る。

だが、ここで終わる訳にはいかない。遭遇してしまった以上は対処しなくては、と考える。

〈主人公〉

「ごめん。なんか恥ずかしいね。こんな事で。……わたし、先生なのに」

「【怒りと悲しみをこらえて、主人公を優しく気遣う】

いいえ。私にもいっぱいいますよ、そんな人。何もおかしい事じゃないです」

〈主人公〉

「ありがとう。ごめんね。気にしないで。

向こうは気づいているかわかんないし、このまましばらく我慢してれば終わるから。窮屈な思いをさせちゃってごめんね」

「でも……」

〈主人公〉

「平気だから」

クラウドディア、主人公の『我慢してれば終わる』という言葉が引かかる。

今、主人公は我慢しようとしている。おそらく、クラウドディアのために。

自分さえ耐えれば、このまま苦難は過ぎ去り、クラウドディアにかける迷惑も、最小限で済むと思っているのだ。

クラウドディアには以前『我慢しなくていいよ』と言って、プール授業を休ませてくれたのに？

では、主人公はなぜそんな事をするのか。

それはおそらく、主人公の方が年上だからである。

つまり主人公は『年上の自分は耐えるべきだ』と思っているのである。

クラウドディア、カッと頭に血が上る。

『そんなわけないでしょう。』

えっ意味がわからない。理屈が通らない事ってやめてほしい。

そんなのぜったいおかしい。

ていうか、先生を大切にしない人と同じ空気とか吸いたくないし……。

あー！ このバスだめです。とにかくだめです。今すぐ出るしかない！』
と考える。

気づいた時には、手を伸ばし、バスの『おりる』ボタンを押している。

SE8 ..クラウドディアが降車ボタンを押す音

【頭から流す】

【0―1秒ほどまでの1回分のみを流してセリフ。バスのアナウンス】

〈バスのアナウンス〉

「次、止まります」

「【落ち着いた様子で、きっぱりと】

降りましょう。ICカード貸して下さい」

〈主人公〉

「え……?」

主人公、突然の事にキョトンとしている。

呆然としたまま、手に持っていたパスケースを素直にクラウドディアに渡してしまう。

SE9 ..バスが停車する音

【途中から流す】

【60秒―90秒ほどまでを流す】

クラウドディア、黙ってパスケースを受け取ると、有無を言わず立ち上がる。

そのまま主人公の手首を握って、振り向きもせず、そのまま出口に向かう。

SE10 ..クラウディアが立ち上がる音

【SE7と同じ音】

【途中から流す】

【4―6秒ほどの、一回分の『立つ』のみ流す】

SE11 ..クラウディアがバス車内を歩く音

【SE5と同じ音】

【途中から流す】

【本来の音よりスピードを速めて流す】

【SE12と一緒に流す】

【6―10秒ほどまで流してからSE13】

SE12 ..主人公がバス車内を歩く音

【SE6と同じ音】

【途中から流す】

【本来の音よりスピードを速めて流す】

【SE11と一緒に流す】

【6―10秒ほどまで流してからSE13】

SE13 .. クラウディアが二人分のICカードを料金箱にタッチする音

【頭から最後まで流す】

【2回連続して流す】

【一回の『ピッ』の後に少しだけ間をあけて二回目の『ピッ』のイメージ】

SE14 .. クラウディアが階段を下りて外に出る音

【SE5、11と同じ音】

【途中から流す】

【本来の音よりスピードを速めて流す】

【SE15と一緒に流す】

【15―20秒ほどまで流してからSE13】

SE15 .. 主人公が階段を下りて外に出る音

【SE6、12と同じ音】

【途中から流す】

【本来の音よりスピードを速めて流す】

【SE14と一緒に流す】

【15―20秒ほどまで流してからSE13】

ここから外。

SE16 .. 雨の環境音

【頭から流す】

【ここから、トラック終了までごく小さな音で流れ続ける】

SE17 .. バスの扉が閉まる音

【頭から最後まで流す】

【小さめの音量にして、うるさすぎないようにする】

SE18 .. バスが去って行く音

【頭から最後まで流す】

【小さめの音量にして、うるさすぎないようにする】

二人、降車する。つまり、まだ学院から一つしか離れていない停留所に降りる。外は雨。バスから降りたばかりの二人の身体が濡れていく。

クラウドディア、このままではいけないと思い、すぐに手を放して傘を開く。

主人公はまだポカンとしており、傘をさすという発想に至っていないらしい。クラウドディア、主人公が濡れないように自分の傘を向ける。

だが、このままでは遠いので、一步近づく。

SE19 ..クラウドディアが水たまりを踏む音

【頭から流す】

【だんだん近づいてくる】

【0―3秒ほど流してSE18】

SE20 ..クラウドディアが傘を開く音

【頭から最後まで流す】

【ここから先、トラック終了まで傘の中】

その時、水たまりを踏んで、クラウドディアの靴が汚れる。

思ったより濡れたが、この日のために選んだような靴だったが、今は気にならない。
もっと大切な事がある。

「【優しく】

先生、傘どうぞ。……先生？」

〈主人公〉

「……あ、ありがとう……橘さん」

主人公、今になってハッと我に返る。

しかし、クラウドディアには『反応が薄い』『怒っている』ように見えてしまう。

よって、クラウドディア、今更不安になる。

『もしかして私、余計な事をしてしまったでしょうか』と聞きそうになる。

だが、すぐに気づく。自分は『そんな事ないよ』と言ってもらいたいただけだと。

自分を拒絶できない主人公に優しくしてもらって、この行動を肯定してもらって、ホッ
としたいだけだと。

そんな卑怯な事はできない。

それにどのみち、やってしまった事は取り消せないものである。
思い切って本音を打ち明ける。

「先生。勝手に降りるって決めちやってごめんなさい。

【一呼吸おいて。勇気を出して断言する】

でも私、間違った事をしたとは思ってません、から。

だって、先生は前私に『我慢しないでいい』『逃げていい』って言ってくれました。
だから、先生にも我慢してほしくなかったんです。

会いたくない人がいるのに、無理に乗り続けてほしくなかったんです」

〈主人公〉

「……そっか」

「はい。そうです。

【少し間をあけてから。不安そうに】

あの、先生……?」

クラウドディア、主人公がこれでも無反応なので、ますます不安になる。だが次の瞬間、主人公が顔を上げ、やっと目が合う。しかもその顔が今にも泣きそうなので、ドキツとする。

主人公『はああ』と大きいため息をつく、と、ゆっくり話し出す。

〈主人公〉

「ごめん。気を遣ってくれてありがとう。

あの、正直に言うね。すっごく嬉しい……。

本当はあの人に会っちゃって、すっごく嫌だった。今すぐ逃げ出したかった。

有り体に言うと、同じバスに乗っていたくなかった！

……でも自分からは言い出せなかった。

橘さんは年下で、わたしの生徒だから。格好つけたくて、平気なふりをしたかったの。

……でも、橘さんは気づいて、助けてくれた。

すっごく嬉しかったよ。ありがとう。

あはっ。さっき『降りましょう』って言われた時、すっごくドキドキしちゃった。

手を引いてくれる橘さんが神様に見えたよ」

「感激して」

先生……！

「一呼吸置いてから。つとめて穏やかに」

よかった。私も同感です。

「ホッとして、思わず口が悪くなる」

先生に冷たくした人となんか、一緒に空気を吸っていただくありません！」

〈主人公〉

「あはは。嬉しい。味方してくれるんだね」

「ムキになる」

当たり前です。私はいつでも先生の味方です。だから安心して下さいね」

クラウドディア『自分も去年のあの日、助けてくれた主人公が神様に見えた』と言いたくなるが、やめる。

なんとなく、今はその時ではないような気がする。もっと他に言うべき事がある。

「『すう』と一度息を吸ってから」

あの、先生。

【おずおずと切り出す】

困ってる時に、年上とか、年下とか、ないです。

先生とか生徒とかも関係ありません。

助けられる人が助けるのが当然です。

これから何かあったら教えて欲しいです。力に、なりますから」

〈主人公〉

「……ありがとう。うん。そうする。これからは格好つけずに、素直に頼るね」

【嬉しくてたまらない】

はい……!」

〈主人公〉

「ということ、本当にありがとう。」

あの、ところでよかったら、何かお礼とお詫びがしたいのですが。

もちろん今日の食事以外でね。

……だって、バス降りちゃったから、次のバスまでしばらくあるし。

お腹もかなりすいちゃってるよね」

「ぎよっとする。その発想はなかった」

お礼？　とんでもないです。そんなつもりでした訳ではありませんから」

クラウディア、とは言いつつも、もしもお礼がもらえるのならば、それはもちろん、ものすごく欲しい。

『喉から手が出るほど』という表現があるが、それなら今、自分の喉からは手がいつぱい出ているはずだ。

あとお腹はすごく減っているが、それは今はいい。

とにかく、卑しい子だとは思われたくない。今回の件は、たとえ相手が主人公以外の人間であつても同じ事をしていた。自分は相当に計算高いが、今回ばかりは計算してない。つまり、衝動的な行動だった。

なので、主人公の弱みに付け込むような事はしたくないのである。
ゆえに悩むが、ここで主人公がさらに押してくる。

〈主人公〉

「だって橘さんはわたしが何かした時『お礼』って、何かをくれるでしょう？

だからわたしも同じ事がしたいの。何でもいいよ。今回のお礼に何でも言う事を聞きます」

「あくまで落ち着いて問いかける。だが、内心興奮していて、すごく食いつきたい」
何でも？ 何でも、いいんですか？」

〈主人公〉

「はい！」

クラウドディア、正直『安請け合ひしないで！ 私が先生とどんな事をしたいと思ってるの！ とても言えないような事ですよ！』と思う。

もちろん、本当の願いは言えるはずもない。

だが、今日はちよつと勇気を出してもいい気がする。

ずつとしてほしかった事を、お願いしてもいい気がする。

とにかく真鍋さんは『莉緒菜さん』で、私は『橘さん』のままなんて嫌！ と思う。

「じゃあ……夏休みの間、また会いたいです。

学校の中でいいので。ご飯食べたりとか、お話したりとか、したいです。

【早口で一氣に言う】 ※句読点を無視する勢いでOKです

それから私の事も、他の子にするみたいに下の名前で呼んで欲しいです」

〈主人公〉

「へっ?」

【恥ずかしくなってくるがはっきり伝える】

クラウディアのあだ名って『デイデイ』って言うんです。

だからそう呼んで欲しいです。

あと」

主人公、てっきりお願いは一つまでだと思っていた。

なので『多いな? 全然かまわないけど。橘さんは意外と欲張りさんだな?』と思っている。

〈主人公〉

「あと……?」

しばし沈黙。雨の音だけ数秒だけ聞こえる。

「**勇氣を振り絞って言う**」

次のバスが来るまででいいので……手を繋いで欲しいです」

主人公、クラウドディアの意外なお願いに、全身が熱くなる。

胸がぎゅうっとなつて、これまでどうやって呼吸をしていたのか忘れてしまう。目を見開いてしまったので、だんだん乾いてくる。

せめて何か言おうとしたが、声が出せなかった。

それから『あ、だめだこれ』と思う。

他人の恋愛感情どころか、自分の恋愛感情にさえ鈍い自分でも、わかる。

『今、クラウドディアの事を好きになってしまった』と。

主人公、緊張して、震える声で手を伸ばす。

〈主人公〉

「わたし、今手汗がひどいのですが。その。それでもよかったら……」

主人公、クラウドディアの手に触れる。

「驚いて声が漏れる」 ※少し喘ぎっぽく、セクシーな印象にする
あ……」

クラウドディア、今一瞬喜びのあまり意識が吹き飛びかけたが、なんとか耐える。
主人公が自分のお願いを聞いてくれた。しかも、主人公の方から触れてくれた！
嬉しくて叫びだしたくなるが、こらえる。

この時、クラウドディアの心の中に、初めての万能感が広がる。
困っている主人公を自分が助けた事と、勇気を出して自分の要望を言えた事。この二つ
が、クラウドディアを大きく変えていく。

「心臓が爆発しそうなのを抑えて、穏やかにふるまう」
ふふ。確かにちよつと、汗かいてますね。

「嬉しくなって、笑ってしまおう」
ふふふ……。あつたかい」

クラウドディア、主人公の方を見つめながら、次のバス時間の事を思う。

できれば少し遅れてほしい。いや、ずっと来ないでほしい……と思う。

二人、そのまま立っている。

待合所にも入らず、停留所の前で立ったままの二人の脇を、車がたまに通っては、通るすぎていく。

このままフェードアウトして終了。